

審査結果の要旨

本論文の内容は、公開審査会（平成30年2月18日10時から12時、於京都府立大学附属図書館グループ研究室1）において説明がなされ、質疑応答が行われた。三好論文の研究史上の意義と、審査会で提出された論点は以下の通りである。

○研究史上の意義

中世後期における地方顕密寺院の研究は、近年の地域社会論の高まりとともに注目を集めている領域である。なかでも仁木宏氏の提唱した都市的結節点となる「山の寺」論では、地方の拠点寺院での経済活動が地域形成の核となる点を論じている。拠点寺院における修験・山伏の活動はこうした文脈で強調されてきた。しかし寺院における宗教活動そのものを考察し中世後期の寺院史や地域社会との関わりのなかで論じた成果は少ない。また根来寺史においては、鎌倉時代後期の学僧頼瑜や近世智積院の研究から導かれた学問寺像と中世後期における「根来衆」の世俗的宗教勢力像の乖離をどのように整合するかが課題となっていた。

三好論文は、従来、全国から山伏が集住し、その活動により強大な軍事力を有したと評価されてきた根来寺について、これまで閑却されてきた学僧の活動を丹念に跡づけることにより、「学山」根来寺の姿を描き出したところに重要な意義がある。根来寺は、全国から客僧を積極的に受け入れ、行学における拠点となったことで、すぐれた学僧や行人を再生産するシステムを構築したこと、また能化を頂点に据えた寺院組織のもと、客僧を包摂した学僧が行人と協力し、「学山」の運営に当たったことなど、従来の根来寺のイメージを大きく塗り替える事実を数多く明らかにしている。これらの指摘は、学僧と行人との対立で描かれてきた中世後期の寺院史研究に見直しを迫るであろう。また従来利用されてこなかった聖教史料を積極的に用いて宗教活動の実態を解明している点も、今後の地域拠点寺院研究において参照される基礎的業績となりえている。

○審査会で取り上げられた主な論点

序章

- ①論文の構成の問題
- ②地域社会論など近年の研究動向との関係

第一章・第二章

- ①対高野山観の変遷
- ②15世紀半ばの自立の要因
- ③2度にわたるの私院急増の背景

第三章・第四章

- ①学衆組織の構成と史料的根拠
- ②能化職成立の意義
- ③往生院結衆人数の史料的根拠

第五章

①智積院再興と家康の宗教政策との関係

②他の新義真言宗寺院の動向

第六章

①高野山と根来寺との比較

第七章

①「地域社会」の定義の問題

②地域経済圏成立と山伏の経済活動の関係

地域社会において根来寺僧が果たした宗教活動と経済活動の両者の関係が不明確で、根来寺の拠点寺院化の画期がわかりにくいという課題を残しているものの、根来寺を一貫した視点で通史的に描き出すことに成功していることや研究視点の新しさ・研究史上の意義に鑑み、本委員会は本論文が博士（歴史学）の学位を授与するに値するものと認める。